

英語における分裂文

——新聞英語の場合——

小山 久美子*

Clefts in Newspaper English

Kumiko KOYAMA

要 旨

文法書で強調構文といわれる分裂文の実際の用いられ方を新聞英語で検証していく。Declerck (1988) が提唱した3つのタイプについて、そのうちの一つである対比的分裂文は焦点がいわゆる新情報か既知情報かで使用が異なると思われる。そこで、上記のタイプを2つに分け、4つのタイプの分裂文の使用分布を調べていく。結果として、分裂文は、何かを強調するというよりはトピックを導入することが主たる機能であり、既知情報が新情報に先行する形を好み、その流れになるようにit分裂文やwh分裂文を用いているといえる。また、聞き手は推測をはたかせながら解釈しているということもいえる。

キーワード：分裂文，トピック，既知情報，新情報

1. はじめに

分裂文¹はかなり以前から研究されていたが、1970年代は、変形文法の影響から派生を中心に進められていた (cf. Akmajian (1970), Higgins (1971), Hankamer (1974), Pinkham & Hankamer (1975))。その一方で、プラグ学派や Halliday, Chafe らが機能的観点や情報構造を研究し、80年代以降プラグマティクスの観点からの分析が盛んにおこなわれるようになった。分裂文に関する代表的な論に、Prince (1978) と Declerck (1984, 1988, 1994) がある。

分裂文は、いわゆる文法書では強調構文ともよばれ、焦点の位置にある構成素を強調すると

*助教授 英語学・言語学

いわれている。(1 c) の it 分裂文, (1 b) の wh 分裂文の be 動詞の後の構成素が焦点 (focus) であり, それぞれ that 節, wh 節が前提 (presupposition) あるいは旧情報 (old information), 既知情報 (known information) といわれていた。

- (1) a. John lost his keys.
- b. What John lost was his keys.
- c. It was his keys that John lost. (Prince 1978)

Prince (1978) は, it 分裂文と wh 分裂文についての分類をし, それらの使い分けに言及している。他方, Declerck (1984, 1988, 1994) は, 分裂文の分類や機能について Prince と異なる見解を出している。Declerck は強調だけでなく網羅 (exhaustiveness) や対比 (contrast) の含みもあるとし, 新たな分類をしている。しかし, 彼の分類にも不備な点がみられる。

本稿では, it 分裂文と wh 分裂文といういわゆる分裂文について, まず, 先行研究として Prince (1978) と Declerck (1984, 1988) とを比較しながら分裂文の特性を検証し, その不足点を補いながら, 次に新聞における実例とそれらの論を照らし合わせ考察していく。新聞は, 通例, 事実を伝え, 感情移入をせず, 中立の立場をとるとされている。そのようなところに, 果たして, 強調構文といわれる分裂文が生じるのかどうか, また, 生じる場合はどのような機能を果たしているのかを情報構造を中心に考察していく。

2. 先行研究

2.1 焦点に強勢をおく分裂文と情報価値のある前提をもつ分裂文

Prince (1978) は分裂文を上記の (1 b) (1 c) の形のものとし, 焦点となる名詞句も it 分裂文は有性 (animate) や無性 (inanimate) であるのに対し, wh 分裂文は後者のみを焦点とする傾向があると述べている。ところが, 例外として次の (2) を注に示している。

- (2) a. I don't need money — what I need is you.
- b. What he wants to be when he grow up is Pope.
- c. What John wants to marry is a Norwegian.

たしかに, (2) の wh 分裂文の焦点は有性である。しかし, これは有性であって有性ではない。

つまり、生身として人間を叙述しているのではない。この点については、後述するように Declerck の理論的枠組みを用いれば解決できる。

さて、wh 分裂文と既知情報の関係を考慮して、Hankamer (1974) が wh 分裂文は談話の最初に生じることはできないとしていた。既知情報を wh 節にもたなければならないということは、典型的には、談話がそれ以前にあってその情報を指す言語要素が明示されているはずだからである。これに対し、Prince は次の例を示している。

- (3) ##What we have set as our goal is the grammatical capacity of children — a part of their linguistic competence.

これは、言語学の論文の最初に書かれた文であるが、タイトルがあったとしても、ふつう著者が何かを目標に定めていることはわからないというのである。もちろん、冒頭に書かれていることからこの前に明示されている文脈が存在することもない。しかし、明らかに推測の橋渡し (inferential bridge)² がなされているというのである。それは言語文脈からではなく、状況からの橋渡しである。つまり、言語学関係の読者であれば、論文に目標を置いているということは推測できるというのである。このことから、wh 節の情報が発話の時点で明示的に示されており聞き手の意識内にすでに存在していなければならないということにはならず、これが wh 分裂文の談話条件となっている。いいかえれば、聞き手が発話を聞いたときに、主語である wh 節内のことがらが聞き手の意識内に適切にあることを協調的な (cooperative) 話し手・書き手が推測できないなら、wh 分裂文は談話内でその流れを損なわずに生じることができないというものである。聞き手の意識内に適切にあると思われるものは、談話の状況によって異なってくる。したがって、情報が明示的に存在する必要はなく、話し手が推測可能であると考えらることであればよいということになる。そこで、(4) のような分裂文を発することができるというのである。注意すべきは、話し手側の立場から推測可能であると思っているという点である。

- (4) ##Hi! What I wonder if I might borrow this time is a cup of sugar.

一方、Prince は it 分裂文を 2 種類に分けている。一つは、強調された焦点をもつ it 分裂文 (stressed focus *it*-cleft)、他の一つは情報価値のある前提をもつ it 分裂文 (informative-pre-supposition *it*-cleft) である。前者が wh 分裂文と違う点は、前提のもつ伝達上の価値である。

すなわち、wh 分裂文の wh 節は聞き手が考えている、あるいは考えることができることについて話し手が推測していることであるのに対し、この it 分裂文の that 節は旧情報または既知情報を表しており、しかも聞き手の意識内にあると推測されるような有標の (marked) ものではなく、談話の主題 (theme)³でもない、まったくの旧情報、すでに過去に述べられている明示的な情報である。つまり、伝達上の価値はかなり低い。これに対し、後者の it 分裂文は、聞き手にとってまったく新しい情報をすでに知られているかのように伝えようとするもので、伝達上の価値は非常に高く、また新情報を文末にもってこようとする情報構造の原則に則しているといえる。つまり、that 節の情報こそを聞き手に知らせようとしているというのである。さらに、このタイプの分裂文は談話の口火を切ることができるのである。そこで談話の初めにくることのできる wh 分裂文と比べると、違いは明確で、この it 分裂文の that 節の内容はまったく聞き手にとって新しいことであるのに対し、wh 分裂文の場合は、wh 節の中身は談話のレベルで推定されることである。この点で、強調された焦点をもつ it 分裂文とも異なることがはっきりしている。

このことを裏付けるいくつかの点をあげている。まず、情報価値のある前提をもつ it 分裂文は、that 節に弱強勢があるが、強調された焦点をもつ it 分裂文のそれにはない。第二に、前者の焦点は短く前方照応的 (anaphoric) である。第三に、このタイプは that 節を省略できない。(5) がこのタイプである。

- (5) ##It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend. On September 25, 1962, in a somewhat shocking move for that time, he decided to establish a 40-hour work week, giving his employees two days off instead of one.

では、(5) のような分裂文の、論理的には前提とされるといわれていた that 節になぜ新情報が生じるのだろうか。Prince によると、このタイプの機能は、その情報が聞き手には知られていないが、ある人たちには知られている事実であるかのように示すことであると述べている。したがって、歴史の語りや話し手がその信憑性に対し個人的に責任をとりたくない場合など、話し手の責任を軽減する効果がある場合に用いられるとしている¹。(5) でヘンリーフォード社が週末を休みにしたことは周知の事実であるかのように提示されており、知らないのは聞き手だけなので、知らせてあげているんだよというのである。他にも、ポライトネスからこのタイプを使うとか、背景 (background) をあらわしたり、原因と結果を示したりすることがこのタイプの分裂文の機能であるという。

たしかに、そういうはたらきもあるが、例を見ていると焦点は必ずしも前方照応的ではないし、that節のみを聞き手に周知のこととして示すことがこのタイプの分裂文の機能であるというのは強すぎる。周知の事実として伝えるのであれば、なにもit分裂文の形をとらなくてもよい。さらに、it分裂文はこのように2種類に分けられたが、wh分裂文にはこのような区別をしていない。しかし、実際にはwh節が新情報である例はある。このように、Princeの説には不備がみられる。そこで、次にDeclerck (1988) をみることにする。

2.2 対比的分裂文，非前方照応的で強勢のない焦点をもつ分裂文，継続性のない分裂文

Declerck と Prince の決定的な違いは、前者が分裂文を特定の文 (specificational sentence) であるといった点である⁵。あるものについての叙述をする叙述文 (predicational sentence) と異なり、特定の文は、ある変項 (variable) に対して値 (value) を特定する (specify) のである。分裂文の場合は、that/wh 節が変項であり焦点が値である。特定の文の特徴として、同定の情報 (identifying information) を与えるということが挙げられる。

- (6) a. What did you get? — A book.
 b. It was a book that I got.
 c. What I got was a book.

(6) はすべて “there was something that I got” を前提しており、この変項に対する値としてあげられる候補の中から a book を取り出して特定している。さらに、特定文の解釈としては、焦点は変項を満たす値をすべて網羅しているリストであるということがいえる。(6b) (6c) においては、「私が手に入れた」ものは1冊の本だけで、他には手に入れていないということにはほかならない。一方、(6a) では他にも手に入れたものがあるかも知れず、“exhaustiveness” であるかどうかは曖昧である。本稿では、彼の主張を支持し、分裂文は特定の文であるという立場をとる。

ところで、Prince が wh 分裂文には有性の焦点はこないと主張し、その例外として挙げた(2)の例文であるが、Declerck は指摘していないが、彼の論に沿うと説明がつく。すなわち、彼の論では wh 分裂文⁶ も it 分裂文同様に特定の文であるので、焦点の you, Pope, a Norwegian は変項に対する候補の中から選ばれた値であって、生物学的に有性であるということとは関係なく、生身の人間としての叙述しているのではないといえる。したがって、例外とする必要はなくなる。

さて、分裂文が特定のであることを示すもう一つの例は次の (7) である。(7) は Prince が、wh 分裂文と異なり it 分裂文の that 節は聞き手の意識内にあると思われる必要がないとして挙げた例である。

- (7) I've been bit once already by a German shepherd. It was really scary. It was an outside meter the woman had. I read the gas meter and was walking back out ...

この例をみると、that 節の内容が発話時点ですでに聞き手の意識内にあるとは思えない。つまり、焦点も that 節も聞き手がすでにわかっている、あるいはわかりうるというものではない。だが、このような文は、談話の初めに生じることができる。このことも、分裂文が特定のであるということの証明になる。特定の文は、文脈がなくても使用可能である。つまり談話の初めに使うことができるからである。

同様に、wh 分裂文の場合も談話の口火を切るのに使われている。Prince の主張と異なる点は、彼女が wh 分裂文の wh 節内は明示された既知情報、もしくは発話を聞いてから推測によって結びつけることができるものとしているのに対し、Declerckの方はまったく新しい情報で、Prince のいう情報価値のある前提をもつ分裂文に相当するものである⁷。Prince は it 分裂文にのみにこのタイプを設けていたが、Declerck は wh 分裂文にもこのタイプが存在することを認めている。

このように、it 分裂文にも wh 分裂文にもそれぞれ2通りのタイプがあるといえるのだが、Declerck は情報価値のある前提をもつ分裂文にはさらに2つのタイプがあると主張している。そこであらたに次のような3種類のタイプを提示している。対比的分裂文 (contrastive cleft)、前方照応的で強勢のない焦点をもつ分裂文 (uncaccented-anaphoric-focus cleft)、継続性のない分裂文 (discontinuous cleft) である。下記の (8), (9), (10) がそれぞれの例である。

- (8) a. Nobody knows who killed the old man. The police seem to believe that it was a tramp who did it.
b. What do you need? — What I need is a sheet of paper and a pencil.
- (9) It was also during these centuries that a vast internal migration (...) from the south northwards took place, a process no less momentous than the Amhara expansion southwards during the last part of the 19th century.
- (10) It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend. On September 25,

1926, (...) he decided to establish a 40-hour week, giving his employees two days off instead of one.

対比的な分裂文では、that/wh 節が既知情報で、発話の時点で聞き手の意識内にあると推測される。焦点の名詞句には強勢があり対比的であって、それ以前の文脈に生じることもあれば生じないこともある。また、that/wh 節は既知情報であるので、継続性のあるトピックということになり、談話の初めに生じることはない。一方、前方照応的で強勢のない焦点をもつ分裂文は、that/wh 節が新情報を表しているため、それまでの談話の流れとは関係がなく、他方、焦点の名詞句には継続性がみられる。焦点には強勢がないので対比的な解釈はない。焦点が前方照応的で連続性があるということは、談話の初めに用いられることはないということである。that/wh 節の方はふつうの強勢がおかれる。最後に、継続性のない分裂文であるが、that/wh 節も焦点も共に新情報であり継続性がないので、談話の初めに生じることができる。つまり、後続の談話の最も重要なトピックとなり続けることがある。この点で、前方照応的で強勢のない焦点をもつ分裂文と異なる。

Declerck は、分裂文は対比的であるという含みがあり、変項を満たすものとして特定の値が選ばれたという強調があり、その値は変項を満たすすべての要素を有している集合であるということを含意していると考えている。Prince が it 分裂文を特定のでない文とのみ比較して、新情報を既知情報であるかのように聞き手に知らせることが it 分裂文だけの特性であるとしているのに比べると、Declerck の考える機能の方が妥当であるといえる。理論的には彼の分類が妥当であると思えるが、実際にどの程度この分類にあてはまる分裂文が用いられているかは定かではない。また、対比的な分裂文の焦点については、前述されていないという本当の意味での新情報とすでに述べられている既知情報との区別をしていない。このことは後述するように、実際の使用にとっては大きな要因となる。

そこで、次の章では、英字新聞における分裂文の実際の分布・用法を考察していく。

3. 新聞英語における分裂文の用法

3.1 情報構造とトピック導入

前章では、Declerck が焦点が新情報で that/wh 節が既知情報、焦点が既知情報で that/wh 節が新情報、焦点と that/wh 節がともに新情報という3つのタイプを提示したことをみた。たしかに彼の唱える3つのタイプが妥当であると思われる。しかし、彼は対比的分裂文について

は、焦点が新情報であるか既知情報であるかについて詳細を論じていなかった。彼のいう新情報とは、いわゆる既知情報でも変項に与えられた時点で新情報であるという意味での新情報で、実際に全く知らなかった情報としての新情報なのかそれ以前に知っていた情報、つまり既知情報なのかは区別をしていない。ところが、焦点が既知情報であるかまったくの新情報であるかによって、談話の流れがスムーズにいくかどうかが決まってくると思われる。そこで、この章では、上記の対比分裂文をさらに2つに分け、全部で4つのタイプについて実際にどのように用いられているのかということを見ていくことにする。

談話はトピックについて展開していくので、トピックを変えるためにはあらたにトピックを入れるはたらきをするものが必要である。分裂文はその役割をしているのではないと思われる。焦点だけ、あるいは、that/wh 節だけがトピックとなることもあるだろうが、焦点と that/wh 節両方の組み合わせがトピックとなることもあるはずである。

以上のことから、次のような仮説をたててみることにする。

- (11) 分裂文は特定の文のように変項である that/wh 節に焦点となる値を付与し、談話にトピックを導入するはたらきをする。

一方、it 分裂文と wh 分裂文の使い分けはどのような要因によるのであろうか。話しことばの場合は、重要なこと、新しいことはなるべく最後にもってくる方が聞き手の耳に残りやすいということはよく知られている。書きことばの場合も、同様である。ということは、既知情報が先に置かれているタイプの方が使われやすいのではないと思われる。そこで、次のセクションでは、実際に分裂文がどのような使われ方をしているかをみながら仮説 (11) を検証していくことにする。

3.2 各種分裂文の使用分布

新聞は事実を客観的に報道するもので、記者は中立の立場で、自分の考えから何かを強調するということがないはずであると思われる。そこで、強調構文といわれる分裂文が用いられているかどうか、もし用いられているならそれは何かを強調しているのか別のはたらきをしているのか、それはどういうはたらきなのかを考察していき、仮説 (11) の妥当性を検討していく。ここで用いる新聞はすべて英語を母国語または日常語とする人による記事で日本人記者によるものは除いている。

まず、新聞に分裂文が用いられているかどうかについてであるが、実際、新聞では it 分裂文

も wh 分裂文も共に用いられている。得られた総数 130 例のうち、it 分裂文が 86 例 (66.2%)、wh 分裂文が 44 例 (33.8%) であった。実際の例を種類別に見ていくことにしよう。

(12) は焦点が本当の意味での新情報で that 節が既知情報という、Declerck のいう対比的な分裂文の例である。このようなタイプは、it 分裂文 86 例中 21 例 (24.4%)、wh 分裂文 44 例中 19 例 (43.2%) であった。

(12) On that April morning, it was thousands of Argentine teenagers who spilled onto the beach.

They were chicos from the pampas on the adventure of their lives, a tragicomic little war that would change Argentina forever and leave scars on these remote islands in the South Atlantic. (*International Herald Tribune*, April 3, 2002)

上記の一文で一パラグラフとなっている。この前のパラグラフでパラシュート降下隊が浜辺に降り立ったということが書かれているので、いわゆる that/wh 節はすでにわかっていることといえる。ここではそのパラシュート降下隊が他ならぬ 10 代のアルゼンチン人であったということ特定しており、しかも、次のパラグラフはこの若者たちが主語となっていることから、トピックの継続性が認められる。すなわち、トピック導入をおこなっているのである。

さて、上記の例は焦点に新情報がきているが、焦点と that 節が共に前述されている既知情報である対比的な it 分裂文は、下記に示すとおり比較的好く見られるようである。

(13) ##In one appearance after another during his 72-hour stay in Japan, President George W. Bush was so full of praise for Prime Minister Junichiro Koizumi that many Japanese were left with the impression of an unusually long hug.

...

“Ten years ago, Japan was perhaps a little overconfident,” he said. “Today, Japan has lost confidence in itself.”

Many Japanese political analysts say it is Koizumi himself who has lost the most confidence lately. The prime minister has been battered in opinion polls recently over his firing of a popular foreign minister, and he is increasingly challenged from within his own Liberal Democratic Party. Indeed, before his vaunted structural reforms ever got off the ground, Koizumi was pushed to change directions recently and declare a new war

against deflation. (*International Herald Tribune*, February 20, 2002)

この記事の最初のパラグラフにすでに「小泉」首相の名前が出ており、分裂文のすぐ前のパラグラフに「自信を失った」とあるので、分裂文の焦点も that/wh 節も共にすでにわかっていることである。ただ、分裂文の前のパラグラフにおいて「自信を失った」のは日本であると述べられているのに対し、「自信を失った」のは「小泉」であるということを分裂文によって示している。すなわち、「自信を失った」という変項に該当するのは他ならぬ「小泉」という値であり、「小泉」以外にはないということを表している。変項がすぐ前にあるのに対し、値となるものは最初にあるもので、途中に出てきた様々なものではないということが対比というか意外性を増し、情報価値を高めているといえる。このように、分裂文は既知情報である変項に対し既知情報の値を付し、新しい情報として伝えている。すなわち、項目と値の組み合わせこそが新しい情報といえるのである。しかも、その後の文にもこの続きとして理由が述べられていることからトピックを導入したといえる。

ところで、対比的な分裂文の中でも焦点に新情報がくるかいわゆる既知情報がくるかによって it 分裂文を用いるか wh 分裂文を用いるかの差がはっきり出ている。(12) のように焦点に新情報をとる対比的な it 分裂文は 21 例中 5 例 (23.8%) しかなく、対比的な wh 分裂文の方は 19 例中 16 例 (84.2%) であった。焦点に既知情報をとる対比的な it 分裂文は 16 例 (76.2%)、wh 分裂文はたった 3 例 (15.8%) であった (表 1 を参照)。現時点で言えることは、いかに焦点といえども新情報が文頭近くにくるよりは、既知情報の方が談話の流れにそっているのではないかということである。そのうえ、新情報は情報量が多いので文末焦点の原則にもあっている。いいかえれば、新情報を焦点にしたい場合は、焦点が先にくる it 分裂文よりも焦点が文末にくる wh 分裂文の方が座りがいいということである。このことは先にも述べたように、Declerck がおこなわなかった対比的分裂文の焦点を 2 つに分けたことによって証明されたのである。

次の (14) は焦点が既知情報で、that/wh 節が新情報で、Declerck のいう前方照応的で強勢のない焦点をもつ分裂文である。

- (14) It is here that Christa Worthington came four years ago to start her life over, to remove herself from a worldly life that others might envy, but to her had become deeply unsatisfying. Ms. Worthington, who worked for Elle and Women's Wear Daily and who was a free-lance writer for Harper's Bazaar, The Independent of London and The New

York Times, wanted to have a baby. (*International Herald Tribune*, March 6, 2002)

この分裂文は3つ目のパラグラフの最初にあるが、最初のパラグラフに場所が明記されているので here というのは当然既知情報である。さらに、この記事は Christa が殺されたという記事であるが、この3つ目のパラグラフの第一文である分裂文の that 節に初めて主人公が登場している。このように、対比的な分裂文と同様に、談話にトピックを導入するはたらきをしている。しかも、この場合のトピックは談話全体のトピックである。

実際、焦点が既知情報で that/wh 節が新情報であるタイプが it 分裂文で 43 例 (50.0%) と it 分裂文の中でも圧倒的に多いようである。wh 分裂文ではわずか 2 例 (4.5%) で、やはり、談話の流れからいっても既知情報が先にくる方が話が続けやすいと思われる。wh 分裂文の場合、wh 節が新情報で文頭にくると前述の対比的な it 分裂文のように座りが悪いようである。

Declerck のいう継続性のない分裂文、つまり焦点も that/wh 節も新情報という分裂文は (15) が示すように談話の初めに用いられている。

(15) ##It is a \$20 gold piece from 1933 that was ordered destroyed by President Franklin D. Roosevelt. (*International Herald Tribune*, May 1, 2002)

これは、double eagle と呼ばれる 20 ドル金貨についての記事である。第一文にこの分裂文を用いることによって、金貨というトピックを導入し、その歴史やオークションの話を展開している。このように第一文に分裂文が用いられている例は、130 例中 1 例しかなかった。ということは、談話の最初にくる分裂文を談話全体のトピック導入に使うということはいままでの話ではないかと思われる。ただ、談話全体のトピック導入をこのような形ですることは珍しいかもしれないが、パラグラフのトピックを導入するのにこのタイプの分裂文を用いることはよく見られる。次の (16) は記事の 2 つめのパラグラフである。

(16) It is the impatient young Palestinians who in effect turned Ariel Sharon into the prime minister of Israel. And with each additional Suicide bombing, they increase the prospect that Sharon will be succeeded by the only person who could make him look like a pacifist wimp: Benjamin Netanyahu. (*International Herald Tribune*, April 3, 2002)

(17) ... That bit of history is relevant now, not least because Shinzo Abe is Nobusuke's grandson, while Yasuo Fukuda is the son of former Prime Minister Takeo Fukuda, a member of kashi faction. Moreover, Eisaku was Kishi's younger brother.

What Kishi's heir cannot say publicly is that they worry that deterrence may not work as well as it once did. This was probably an inevitable consequence of the end of the Cold War. ... (*International Herald Tribune*, June 13, 2002)

(16) はブーメランシンドロームについての記事である。it 分裂文の焦点である the impatient young Palestinians が次の文の主語としてあらわれているように、このパラグラフのトピックを持ち込んでいる。次のパラグラフもパレスチナ人の話ではあるが、「若い」という限定はないし、記事全体もパレスチナの話ではあるがこの焦点が談話全体のトピックとはいいかねる。だが、若くはなくても「パレスチナ人」に他ならないので、この記事全体のトピック導入に一役買っていることになる。また、(17) は核に関する発言を取り上げた記事である。文頭の wh 節の主語自体は既知語であるが節全体は新情報である。また、焦点の that 節も新情報であり、次の文に受け継がれていることからトピックを導入したといえる。

このように、継続性のない分裂文は、談話やパラグラフの初めにくると談話全体やパラグラフのトピックを導入するはたらきをしている。このような継続性のない分裂文は、it 分裂文が 22 例 (25.6%) で wh 分裂文が 23 例 (52.3%) であった。

ところで、今回調べた 130 例のうち、パラグラフの最初にあらわれた分裂文は 91 例 (70%) で、そのうちトピック導入をしていた分裂文は 84 例 (92.3%) であった。パラグラフの最初でなくてもトピック導入をしていた分裂文は 21 例あり、130 例のうち 105 例 (80.8%) がトピック導入をしている。ということは、現段階での見解として、分裂文は焦点を強調することもさることながら、談話の流れを決めるトピック導入という重要な機能を果たしているといえる。

ところで、一見新情報と思えるものも聞き手がすでに明示されたものから推測によって関連づけをして解釈できることもある。以下はそのような例である。

(18) Luis Fernandez, a spokesman for the Cuba interests section in Washington, strongly denied Bolton's assertions. "What he said is a big lie and a big slander," Fernandez said. He accused the Bush administration of trying to extend the concern over international terrorism to Cuba in order to justify hard-line policies at a time when U S farm groups,

英語における分裂文

... (*International Herald Tribune*, May 8, 2002)

この記事は、生物兵器に使用可能な細菌をキューバがつくったということをブッシュ政権が発表したと述べているものである。この wh 分裂文の wh 節はすぐ前の文の Bolton's assertion ということから推測できる。一方、焦点である a big lie and a big slander は同じく前文の strongly denied という部分から推測できる。キューバの Fernandez がアメリカ側の主張が本当のことではないと言っているのであるから、「嘘」ということを導くことができる。さらに、わざわざ嘘を言うということは何らかの意図、この場合はそれまでの文脈から善意によるものではなく悪意によるもの、すなわち「中傷」ということにつながる。このように、聞き手が前文から推測によって解釈することができる。聞き手側が協調的にはたらいたといえる。

次の例は、カシミール問題についての記事である。

(19) ... that any solution must rest on recognition of the existing cease-fire line as the permanent international boundary.

...

It was the United Nations that drew the cease-fire line, imposing a division of the state that should now be formalized to stabilize the peace between South Asia's nuclear-armed neighbors. (*International Herald Tribune*, February 13, 2002)

分裂文の焦点である国連はかなり前のパラグラフに明示されている。しかし、that 節の drew the cease-fire line は明示されていないが、二番目のパラグラフに existing cease-fire line とあるので、停戦ラインがすでにある、つまり停戦ラインが過去に引かれたということが推測によってわかる。

以上のことから、話し手側から見るとトピックを導入するために分裂文を用いることが多く、

表1 分裂文の使用状況 (数字は実例数)

分裂文の種類	it 分裂文	wh 分裂文
対比的な分裂文 (焦点が新情報)	5	16
対比的な分裂文 (焦点が既知情報)	16	3
前方照応的で強勢のない焦点をもつ分裂文	43	2
継続性のない分裂文	22	23
合計	86	44

情報構造の観点からみると、既知情報が先に来るタイプの分裂文がより多く用いられるということがいえる。対比的な分裂文の場合でも、焦点に新情報を置く場合はwh分裂文を好み、焦点が既知情報の場合はit分裂文を好んで用いるといえる。また、聞き手は推測という作業をしながら協調的に理解していると思われる。本稿では、このように推測を必要とする例は他にもみられたという事実を述べておくにとどまる。今後は話し手のみならず、聞き手の協調に関してさらに整理する必要がある。

4. おわりに

中立的立場をとると思われている新聞における分裂文の実際の使用状況についてみてきたが、焦点が既知情報であるit分裂文が多く用いられていることがわかった。これは、文末焦点の原則にも合った傾向である。たしかに、it分裂文で新情報を焦点に置くというのは、対比的で強調しているように思われるが、実際は、焦点に既知情報がきて、変項に対して値を付与し、その情報をトピックとして導入し次の話を構成していることがわかった。これは、パラグラフの最初に用いられることが多いことや、wh分裂文で継続性のない分裂文が多いことからいえる。すなわち、強調構文といわれる分裂文は、焦点にくるものを強調するというよりも、トピック導入というはたらきの方が多いといえる。また、聞き手の方も推測をはたらかせて協調していくことが望まれている。話し手は、聞き手がそうしてくれることを予想して談話を組み立てているといえる。したがって、協調が話し手のみならず聞き手にも必要であるといえる。具体的な原則として立ち上げるのは今後の課題である。

また、現時点での例文の数は決して多いとはいえ、さらに例を集めて統計をとり続けていかなければならない。さらに、新聞という限られたスペース、活字数の制約を有することが関係しているのかどうかということも含め、今後、他の言語資料と比較検討して調べる必要がある。

注

- 1 本稿では、it-cleftとwh-cleftの両方を総称して分裂文と呼ぶことにする。学者によっては、it-cleftを分裂文、wh-cleftを擬似分裂文と呼んでいるが、総称名と混乱するので、it-cleft、wh-cleftをそれぞれit分裂文、wh分裂文ということにする。
- 2 Haviland & Clark (1974) を参照。
- 3 Hallidayは、主題 (theme) とは「今話していること」であり、与えられた情報 (given) とは「以前、

英語における分裂文

話していたこと」であるとしている。

- 4 ある意味で hedge に似ている。
- 5 Declerck は分裂文のひとつのタイプとして、叙述的分裂文もあると述べているが、分裂文は、本来、特定の文であると主張している。
- 6 Declerck は下記のようなタイプも wh 分裂文と考えているが、本論ではこのタイプは除いて考察している。
 1. The one who opened that door was John.
 11. The police chief was who I meant.
- 7 つまり、wh 節の新情報をまるで皆に知られていて、知らないのは聞き手だけであるかのように提示している。これは特定の文の有標的 (marked) 用法であり、このタイプの分裂文は特定の文の有標的用法である。他方、強調された焦点をもつ分裂文は that/wh 節が既知情報であるので、同じく特定の文ではあるが、無標的 (unmarked) 用法である。
- 8 言語資料が新聞なので、聞き手というよりは読み手というべきであると思われるが、従来の言い方を踏襲して聞き手という語を用いる。同様に、話し手も書き手というべきところをそのまま用いることにする。

参考文献

- Akmajian, A. 1970. "On deriving cleft sentences from pseudo-cleft sentences." *Linguistic Inquiry* 1, pp. 149–68.
- Collins, P.C. 1991. *Cleft and Pseudo-Cleft Constructions in English*. Routledge.
- Declerck, R. 1981. "Pseudo-modifiers." *Lingua* 54. pp. 135–63.
- . 1983. "Predicational clefts." *Lingua* 61. pp.9–45.
- . 1984. "The pragmatics of *it*-clefts and *wh*-clefts." *Lingua* 64. pp. 251–89.
- . 1988. *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Leuven University Press.
- Grice, P. 1967. "Logic and conversation." In P. Cole and J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics* 3. Academic Press pp. 41–58.
- Hankamer, J. 1974. "On the non-cyclic nature of *wh*-clefting." *Papers from the 10th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp. 221–33.
- Haviland, S.E. and H. Clark. 1974. "What's new? Acquiring new information as a process in comprehension." *JVLVB* 13. pp. 512–38.
- Higgins, F.R. 1971. "The pseudo-cleft construction in English." MIT dissertation
- 小山久美子. 1999. 「英語における分裂文の機能」『川村学園女子大学研究紀要』第10巻, 第1号. pp. 23–36.
- Lambrecht, Knud. 1994. *Information Structure and Sentence Form*. Cambridge University Press.
- Pinkham, J and J. Hankamer. 1975. "Deep and shallow clefts" *Papers from the 11th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp. 429–50.
- Prince, E. F. 1978. "A comparison of *wh*-clefts and *it*-clefts in discourse." *Language* 54, pp. 883–906.